



南極

第15号

平成15年4月17日
南極倶楽部会報

癸未正月の喜びと悲しみと

星合孝男

癸未正月、2003年1月5日、仙台の目黒熙さんからの突然の電話に少なからず驚いた。目黒さんは40余年来の知己ではあるが、電話で話をするというお付き合いはしてこなかったし、元日に賀状を戴いたばかりだったからである。「何か急な御用でも。」と急ぎ込んで尋ねる私に「いや、海氷が溶けたすぐ後の海面のクロロフィル量が大きいことが、環境観測衛星“みどり”のデータ解析からわかったんで、国際会議で発表しました。」とのことであった。

- この事は2月1日の朝日の夕刊で紹介された。 -

目黒さんは5次の夏隊に参加し、昭和基地北の海域で微細藻類により褐色になった海氷を見た。そして、冬海氷の上に降り積った雪の重みで海氷が少し沈み、雪と氷の間に海水が侵入する。海水中には微細藻類の“タネ”が含まれている。季節が廻って春になり、日射が増えると“タネ”は発芽し普通の細胞になる。細胞は分裂を繰返し、増えた藻類で海氷と積雪の境界部分が褐色に染まる。夏になると、海氷は割れ

たり溶けたりして、藻類は海に戻る。という仮説を1962年南極資料14に英文で書いた。この説は広く国際的にも認められ、海氷の微小藻類を扱った論文の多くに引用された。これとは別に、海氷の下端部でも藻類が増え、褐色に染まることが広く知られている。“みどり”が記録した、海氷消失後の海水中のクロロフィルは、こうした過程で生産されたものだと、目黒さんは考えているようだった。海氷からの藻類だけでなく、海水中の植物プランクトンも加わってのことだと私は思うのだが、これは専門誌とか学会で議論すべき事。ここでは、40年間好奇の目で見た南極の海氷と微生物に対する関心を失わないだけでなく、新しい挑戦もする姿に思わず喜びの声を上げた。

同じ1月27日朝、電話が鳴った。「松田の息子ですが、父が今朝亡くなりました。」「えっ!」と私。26日夜、美味しいと夕食をしたためた松田達郎さんが、真夜中ににわかに亡くなったということであった。第4次夏隊に参加した松田さんが、「南極の海氷にはプランクトンのために色が付いたものがある。」と持ち帰った幾つかの氷の塊が、

私と南極とを結び付けることになった。着色海氷の話聞いて、海水が凍るとき藻類か原生動物が氷に閉じ込められたのではないかと、などと思いはしたが、深く考えはしなかった。だが、青森にある東北大学の臨海実験所に勤務していた私が、海の近くにいるからと、この氷を調べることになった。

夏休みを利用して仙台に出向き、苦竹の冷凍会社に預けてあった氷を、時々松田さんのバイクに乗せてもらって、片平丁の研究室に持ち帰り、冷蔵庫の冷凍室に入れ、小分けにして溶かし、顕微鏡で観察した。この頃には、もう氷の色はあせ、ただの塩っぱい氷でしかなかったが、溶かした水滴の中には細胞質の入った珪藻という微小な藻類が沢山入っていた。珪藻の姿・形は、これらの珪藻が生きてまま海氷の中にいたことを示しているように思われた。そして、出てくる珪藻の種類は、氷の塊に依って異なっていた。また、海氷の中の藻類と海氷下の海水の藻類とを比べてみると、両方に共通する種類はあるものの、海水中の藻類群と海水中の藻類群とは違うと考えた方が良かったと思われた。つまり、海氷の中の藻類は、海水中の藻類が凍結の際に取り込まれたものではないと、考えたのである。しかし、残念ながら、現場を知らず試料を見ただけでは、なぜ海氷の中に多くの珪藻が含まれているのかを説明することはできなかった。

なんとか、南極で色の付いた氷を見

たいと思っていたところ、あるシンポジウムの席で、3次、5次夏隊員として“宗谷”に乗った経験のある、この道の先達のお一人、福嶋博さんから、目黒さんの観察結果と、着色氷の形成過程についての目黒さんの説を聞き、私はますます南極の海氷を見たくなっていた。

やがて1965年、南極観測再開に際して、松田さんは私に実際に南極海で海氷を調べる道を拓いて下さった。以後の松田さんと私の関係は、南極倶楽部の多くの方がご存知の通りである。その松田さんが亡くなったというのである。受話器を握って私はしばし呆然としたのであった。ご冥福を祈るや切である。

このようにして、癸未正月は喜びに明け、悲しみに暮れた。先日、また、目黒さんと電話で話をする機会があった。「もう年だけど、国際会議の議事録用の原稿を書いています。」という彼に、「お互いにこの先あんまり長くはないだろうけれど、老いの一徹でできるだけ頑張りましょうよ。」と言った。(7次夏・海洋生物)

三次隊 二題

村山雅美

「共通語は何語？」

1959年7月某日、食堂で長憲さん(吉田)がえらく声を荒げてしゃべっていた。「俺の耳が悪いとはけしからん。大

体ありゃ何だ。第一に隊長、次は武藤ドクター（武藤晃）、善吉（平山善吉）までもまるで分からんことばかりいいやがってつんぼだとぬかしやがる。」そこにいた若老（若井登）が静かに割ってはいり「まあまあ。これから会話には件名をつけることにしたらどうだい。」さすが老たけた役人の端くれだと感心する間もあればこそ、脇で煙草をふかしていた荒さん（荒金兼三）、「長憲さん。お茶の件ですが、湯のみをくれませんか」と絶妙な台詞。これにはさっきの怒りは何処へやら、長憲さんはとっときの羊羹を厚切りでお茶を奮発した一幕。

島送り一年をつとめあげてむかえの船頭さんがやってきた時のことだ。武藤ドクター、長憲と私の三人、たわいもない話がはずんでいるのを不思議そうに聞き耳を立てていた船役人「皆さんは何語でしゃべっているのですか？」。無理もない、それぞれ秋田弁、長州弁をマザータングにするドクターと長憲、上下使い分けの江戸言葉に信州弁をはさんで英国紳士風にどもってみせる私、いずれもヒヤリングだけは相互に完全マスターした三人の語学力は駅前留学の比ではなかったのである。

「あどけない青年の話」

1959年12月7日0915、川口少年（川口貞男）一人を昭和基地に残し、全員ハムナ氷瀑へと一台の橇に満載の全員日帰り遠足に出かけた。昼過ぎからハムナ池、周辺の山地を歩く者、帰

路は雪上車のピックアップがある人曳き橇の南極探検擬似体験隊もあった。ゼンベィ（清野善兵衛）・ゼンキチ（平山善吉）・アラさん（荒金兼三）の指揮下に三々五々南極の夏を味わって基地に帰っていった。ハカセ（芳野起夫）・キタチャン（北村泰一）と僕は幕営用具を背に長頭山域の氷河と山歩きを楽しみ、12日までに基地に歩いて帰る予定だった。久しぶりの山歩きのあとロングホブデ氷河を下り、長頭山を高巻きしての北岬のキャンプは10日夕刻だった。食糧・飲料は十分とあれば何を食べたか忘れたが豪遊だったことには間違いない。普段から酒の相手にはふさわしくない二人の青年、山歩きを介しての付き合いのせいか酒の勢いが清水の舞台から飛び降りたのか、ふと耳にはいったのはまさか彼等の話題になるとは思いもしなかったことを口ばしているのではないか。それも低級ならまだしも無知蒙昧まことにあどけない猥談で口にするのもお恥ずかしいがなかなかの傑作だった。が、これには参ったもうつき合い切れない。彼等の足並みは確か、高曇りながらも気圧もしっかり、放っておいても4、5日は生きていられることを確信してこう言った。「今は君たちに言えない事情でこれから僕は昭和基地に帰る。十分気を付けて予定日迄に帰ってこい」。残飯をおじやにして腹につめツエルトにシラフと食糧とウイスキーなどをリックにスキーを北に踏み出したのは2200近かった。気持ちはクロカン走り、

まだ耳に残るあどけない彼等の口振りに思わずニタづきながら追い風もあり気象棟を叩き起こしたのは11日の0100頃だった。何かと驚くゼンペイ・バケ(高室功)・少年に話すも愚かなりとはいえ、問わず語りに基地唯一の二畳の大広間は時ならぬ大笑いが薄夜につきなかつた。(3次冬・副隊長)

私と海軍カレー

仙波真之

何かの加減で暫く口にしないしていると無性に食べたくなるものがあります。皆さんの場合は、それは何でしょうか。私にとっては30数年間規則正しく週に必ず一度は食べていたものがあります。それは「カレーライス」です。海上自衛隊に入って暫くは若さに任せてガツガツ食べていましたが、今考えてみましたら、カレー粉自体も昨今のように色々香辛料を合わせた手の込んだものではないのに本当においしく食べました。ビーフやポークそれにチキンの類は形だけでニンニク、リンゴ、蜂蜜、月桂樹といったしゃれた材料とは無縁で、今食べれば何と単純な味だと思ふかもしれません。少しの肉とジャガイモと人参、そして玉ねぎだけの具にカレー粉と小麦粉、それに調理員の愛情がたっぷり入った黄色いあの「海軍カレー」が懐かしく思い出されます。

昭和34年、江田島の調理学生課程を修業し護衛艦に乗組み調理員としての勤務に就き、そこから「カレー」と

の付き合いが始まりました。最初の頃はカレー粉と小麦粉それに大豆白絞油でカレールーを作り(当時、バターは高価で使えなかつた)味付けは直長がそれぞれ工夫をしていました(註:直長3直制で勤務しているのでその直の前任者)調理人なら料理を食べた人から「おいしかった」と言われることが一番の勲章ですので、みんな味付けには努力をしています。当時はまだ食糧事情が悪く、内地米(少々)外米、若い人たちには判らないと思いますが「人造米」それに麦と4種類の穀物をいかにおいしく炊飯し乗組員に食べてもらうか、これが私の仕事でした(註:人造米 澱粉と小麦粉それに砕けた米を合成して人工的に米の形状に作り上げたもの。炊きたては良いが冷めると団子状になり、現在ではとても食料とはいえない食料。自衛隊草創期には「黄変米」という黄色いカビが生えた外米も食べていましたが、さすがに世論の反対で昭和31年ごろにはなくなりました)。やがて年月が過ぎ階級も上がり直長となり、3日に一度の当直日は味付けの責任者としてカレーの献立日に腕を振るうのが楽しみであり喜びでもありました。

昭和46年6月「ふじ」乗組みを命ぜられ南極地域観測行動に「調理員長」として参加できることとなりその責任の重さに「チョット」戸惑いを感じました。南極行動とはどういうものか?食事は今までの艦船とどう違うのか?次から次へと不安が募るばかりでした。

調理員総員(10名)でミーティングを実施し、結論として観測隊の皆さんと乗組員が喜んで食べてもらえるように誠心誠意調理すること、他の事は考えない、それで出発から帰国まで頑張ろう、ということになり不安を消しました。

そこで調理員長として毎週1回メニューに入っている「カレー」に変化をもたせることにしました。基本はあくまでも肉(60グラム)、ジャガイモ(50グラム)、人参(30グラム)、玉ねぎ(60グラム)、それにカレー粉、小麦粉、バター、サラダオイル、塩、胡椒です。

()内は一人前。料理の仕方ですが、肉は一口大の食べやすい大きさに切りカレー粉と塩少々をまぶして置きます(肉の臭みがとれます)……皆さんも作る時には必ずやってみて下さい。カレー粉をフライパンで焦げる寸前まで煎ったり、リンゴ、バナナ、蜂蜜、ニンニク、福神漬の汁、コーヒーパウダー、および色々な香辛料を混ぜ試行錯誤のなかで出来上がったのが現在の私の海軍カレーです。

13次では強烈なブリザードに会い帰国が遅れましたが「調理員長」としましては翌年の14次を含めて何事も無く南極行動も終了しまして、昭和48年初夏に艦隊勤務に戻りました。しかし素晴らしい南極の魅了が忘れられず、翌年から希望配置調書(隊員は毎年次の希望配置を申請する)に「砕氷艦」と記入して毎年提出していましたがなかなか希望が叶いませんでした。定年

も近くなり諦めかけていたところ、昭和60年5月に「しらせ」乗組みを命ぜられ14年ぶりに南極行動に参加出来ることとなり27次、28次と楽しく勤務することが出来ました。

この行動中も毎週カレーを作り、観測隊の皆さんと乗組員に食べて貰いました。特に先任海曹室では役得と言いましょうか、カレーの残りを保管して2、3日は食べていました(皆さんもカレーを作る場合は多めに作り寝かせると大変おいしくなります)。

30年間毎週作り続けたカレーライス、今、横須賀でご当地カレーとして売り出している評判の「海軍カレー」に勝るとも劣らないと自負しています。

結論としまして、おいしさの秘訣は大量の食材で(愛情を込めて)大量に作ることに尽きるのではないのでしょうか。(13次14次ふじ・27次28次しらせ、調理)

宗谷の思い出

宮本武昌

- 宗谷へのお誘い -

昭和35年3月、私は、函館海上保安部から根室海上保安署「巡視船ゆうばり」へ配置換えの辞令を受け道東地域の守りにつくことになりました。

「ゆうばり」は、新潟鉄工造船所において建造中の350トン型新鋭巡視船でありました。4月竣工した「ゆうばり」は、新潟を出港、根室へ回航したのですが、その年の根室は、例年にない流

氷群により半月ほど入港不能の状態が続き、厳しい勤務地とは聞いていたものの氷の凄さには驚きました。

5月でした。宗谷乗組希望調査があり、私は、どうせ厳寒地方の勤務ならいっそ南極へ行こうかと決意し、早速希望したものです。この時、ゆうばり乗組員30名中約半数が私同様希望しておりました。7月中旬に至り、宗谷主計科勤務の内示を受けまさかの実現で宝くじに当たったような喜びでした。因みに、第5次における第一管区からの新乗船者は2名でした。

8月30日付、海上保安庁に赴任し、宗谷事務室勤務の指定により糧食、物資の調達管理事務に従事することになりました。主計科は、事務関係5名、調理7名で構成し、乗組員、観測隊総計130名を受け持つことになり、その数には驚きでした。

南極洋への航海

乗組員中最ボットの私の業務は、雑役のほか船長等の幹部の生活支援、乗組員、観測隊の生活用具・酒類・煙草等の配給など糧食等の管理に従事という観測、輸送業務のしたささえでありました。

シンガポール出港。インド洋のべた凧、毎日単調な航海が続きます。そんな時主計科吉田官の発案により、船内バーを開業、癒しの時間を設けようということになりました。バーは、全通甲板船尾で中央右舷側の事務室とし、モールを施すなどの改装によりムードは最高でした。明田船長、村山隊長な

ど多数の来店大賑わい。吉田官の見事なシェイカーさばきで各種のカクテルを振る舞い、大好評でした。

ケープタウンを出港しいよいよ南極洋へ、である。避けて通れない暴風圏航行は、調理配膳作業で大苦勞、主計科泣かせでした。

1月2日、冰山を視認したとの船内放送で好奇心から冰山見張所へ登って見ました。見張所は、2名がやっと入れる広さで、暖房は電熱器1個とおそまつ、船体のローリング21度ともなりますと船外に位置するほど。見張りは楽じゃありません。

昭和基地へ -

第2期空輸時でありました。私に昭和基地へ行って来いという指示がありました。宗谷歴代乗組員の中には昭和基地を見ないまま帰国という者が何人かいるというなか、新参者がしかも初回で行ける、まるで狐につつまれたような思いで本当にラッキーでした。早速準備のうえシコルスキーS58・201号ヘドラム缶と共に搭乗し、約50マイル南方(約40分)の昭和基地へ着陸、南極の土に触れ感無量でありました。

帰路のことです。203号への搭乗で離陸一路宗谷へ。機外の氷海をと思っていましたが、203号はどうも西へ飛行していることに気がつきました。203号の操縦は、T機長とS副操縦士。約5分(約8マイル)ほどの飛行で着陸し、降機のうえ状況調査を約10分実施して帰還しました。思いもよらない新地への着陸でまたもラッキーでし

た。機長の言によると、西オングルだということでした。もちろんこの地での石採取の実施は申すまでもありません。

最近のこと -

平成 14 年 7 月 26 日、船の科学館において、日本財団（曾野綾子会長）主催による海洋文学大賞贈賞式が行われました。この贈賞式は、清子内親王殿下のご臨席のもと行われたものですが、同式終了後受賞者等におことばの場が設けられておりました。私は、日本財団の助成事業を担当している関係で本席へ招待されておりましたが、元宗谷乗組員であったことが紹介され、約 2 分ほどご説明する機会をいただきました。時間の関係で宗谷の多くはご説明できませんでしたが、宗谷は 1938 年長崎で誕生、私が 1939 年生まれであるとの説明に対し、殿下から「1 歳違いとは感慨深いものがありますね」とのおことばをいただき誠に光栄のいたりでした。

宗谷は現在、日本財団の助成金により（財）日本海事科学振興財団が管理しておりますが、金食い虫のごとくの存在で維持管理が困難とされ保存が危ぶまれております。日本財団には保存の継続をお願いしております。（5 次 6 次・宗谷）

宗谷ノート(1) - 動揺について

高尾一三

砕氷船はいずれも横揺れが大きいよ

うである。“しらせ”(第 43 次)でオーストラリアから昭和基地に向かう海上で、夜半最大で左舷 53 度、右舷 48 度の揺れを経験し、その時、壁が床になり落下して激突打撲傷を負ったことがありました。(極地研 NEWS 163 号、P.10) 激しい横揺れだと想像できる。宗谷も帰り暴風圏で左 62 度、右 42 度の横揺れを経験している。

1 次の改造で宗谷は密群氷の中で閉塞された時に備えて船体中央部に十分な強度を持たせるため、また十分な復原力を得るため船の両舷にバルジを取付けた。これにより船幅は 3 メートル広がり、それだけ復原性はよくなった。船には横揺れを小さくするため船底湾曲部の両舷に船の長さの $1/2 \sim 2/3$ の「ヒレ」がついている。これを「ビルジキール」という。1 次の宗谷は氷海の航行中船体を傷めないためこのビルジキールを取外した。そのため横揺れが激しかった。乗組員にとって船の横揺れは船酔いの原因となり、また積み荷の「荷崩れ」の要因ともなる。その船固有の横揺れ周期と波の周期とが一致すれば同調をおこし横揺れは大きくなる。

1 次で 2 月 28 日氷海を脱出した宗谷は海鷹丸とともにケーブタウンに針路を向けた。3 月 3 日、夜半、夜空に輝くオーロラを見た。船体は左右に大きく揺れている。当時の日誌をみると「3 月 4 日、暴風圏に近く一日中風速 20 メートル以上の風が吹き荒れ遂に最高動揺左 62 度、右 42 度を記録した。ほ

とんど 30 度を超すすさまじい動揺である」と書いてある。

船は荒天の時、針路を変えたり速力を変えたりして揺れを押さえるが、しかし船に危険がない限り次の変針地点に向け、針路と速力は変えない。乗

組員にとって航海中、船が波と同調するか、また同調すればどのくらい揺れるかは重要な問題である。実際に観測した実例がある。(1次 ケープタウン向け航海中)

時 昭32年 3月4日	針路 度	速力 ノット	横揺れ		周期 秒	風 浪				天気
			左 度	右 度		方向	風速 m/s	方向	波長 m	
12 時	347	9.3	31	36	8.8	WNW	24	NW	90	曇り
16	347	9.1	30	32	8.5	WNW	20	NNW	90	曇り
20	335	9.0	40	43	8.8	W	18	NW	90	曇り
24	335	7.5	38	34	8.9	W	16	NW	85	晴れ
04	335	8.3	38	37	8.8	WSW	13	NW	85	晴れ
08	335	9.0	34	36	9.0	WSW	11	WNW	85	曇り

前述した最大の横揺れは 3 月 4 日午後 5 時 15 分に起こった。上表よりその時の状況を再現すると、午後 4 時頃はケープタウンを目指し針路は 347 度、速力は 9.1 ノット、風浪はほとんど真横近く、宗谷はビルジキールが無いことも手伝って激しく揺れた。ある一瞬、他の不連続な要素も加わって左に大きく 62 度の傾斜が起きたのであろう。

2 次改造では「揺れる宗谷」の汚名を返上すべくビルジキールを取付けた。帰国後ドック入りして調べた結果はビルジキールのすべてが上方に折れ曲がっていた。やはりビルジキールは砕氷船にとっては不向きである。

10 月 22 日 (平成 14 年) 横須賀港

より東京港まで“しらせ”の回航にあわせて、初めて乗せていただいた。前日まで雨で寒かったが、当日は雲ひとつない晴天、約 4 時間の航海だったが宗谷とくらべながら興味ある航海であった。“しらせ”の傾斜計は残念ながら少しの動きもなかった。

排水量 11,600 トンの“しらせ”で 40 度ちかくの横揺れはとても想像できない。宗谷の経験から恐怖さえ感じると思う。少しでも揺れを小さくするためには普通ビルジキールを取付ける。しかし氷海の中では役にたたなかったことは宗谷で経験済みである。“しらせ”の動揺にたいする対策は anti-rolling tank (減揺タンク) を装

置している。この装置の原理は船の両舷に水タンクを設け、このタンクの底をパイプで結び、たとえば船が左に揺れた時タンクの水はこのパイプを通過して左に移り、右にたてなおすモーメントを与え、右に揺り返すと、タンクの水は右に移って左にたてなおし、だんだん減衰してゆくというものである。

1次での宗谷の横揺れは航海の目玉となるほどよく揺れた。しかし大きな縦揺れも経験した。11月15日台湾東方沖で台風遭遇、その時の針路北、風速30m/s、宗谷は台風を避けるため蹴ちゅう（船首を風浪にあてて舵がきく最小の速力で前進する方式）に入った。当時の状況を松本船長はこう書いている「波長140m、波高10mの波は船橋を越える程で、傾斜計は縦揺れ24度、横揺れ38度を指した。私は長い間船に乗ったが一般船で縦揺れが24度もした船はかつてなかった。この時船首が空に向かって跳び上がる時はよいが、下に向かって突き込む時にはこのまま地獄へ直行するのではないかと思われる程いやなものだ。それと船体が折れはしないかということであった。」と。（南極外史 P.86）

横揺れを少しでも少なくするためにはどのような工夫が必要か。結局、宗谷は6回の南極航海のうち1次を除きビルジキールであった。“しらせ”はanti-rolling tankである。

「揺れる宗谷」のニックネーム南極観測が続く限り語られるであろう。

（1～3次宗谷・航海）

☆☆☆ 広告 ☆☆☆
求む老若男女。苦難の南極より生還の至福。僅かな極地手当。地球の未来。社会貢献。報酬なし。奉仕活動の暁には再起発奮と老人力を得る。……

ボランティア団体「南極教室」(仮称)の設立について

国分 征

南極倶楽部例会で度々お話をしたかと思いますが、この場を借りて、南極観測隊OBに向けた「南極教室」の趣旨について紹介させていただきます。

国際地球観測年を契機として始まった南極観測は、第6次隊までの草創期、7次以後の恒久化体制、国立極地研究所の設立などと着実な歩みを進め、半世紀の歴史を刻もうとしております。この間に参加した観測隊員等の関係者総数は、5千人を超えるまでになりました。

さて、南極OBの皆様には、南極観測に関する講演などの広報的な活動の経験をお持ちのことと存じます。こうした活動は、多くの場合、職場や地域社会を通じた個人的なつながりにより行われてきたと思います。公的な極地研究所主催の講演会以外の個人的な広報活動も南極観測事業に対する理解を深めてきた事はいうまでもありません。

全国的に広がりを持つOBのネットワークができれば、個別の活動よりさらに効果的な広報活動に発展すると考えられます。一般講演などの広報活動、小・中学生あるいは高校生に対する教育補助により、次代を担う若い人たちや多くの人々に、地球環境の理解や自然に対する興味を呼び起こしたいとの想いをお持ちの方々は、少なくないでしょう。

この呼びかけは、ボランティア的なOBのネットワークを立ち上げ、南極観測に関する広報に資する活動の一助としたいとの趣旨によるものです。多くの方々の、参加申し込みを期待しております。

会の目的:「南極は地球の未来を考える窓である」そんな思いに共感し、その事を次の世代の子供たちをはじめ多くの人たちに伝えていく活動を行う。具体的には、講演を中心に南極観測に関する広報活動を支援し、小・中・高校生に対する教育補助活動を行う。

会員の資格:前記の趣旨に賛同し、無償の奉仕(ボランティア)活動を行う意志のある人であれば、誰でも参加できる。南極観測に関心があれば、南極経験者に限らない。

会員の義務:全国どこかの小・中・高校あるいはそれに準じる会合で、講演などの普及活動を行う。

会の組織・運営:必要に応じて会長、事務局長その他の役職を置く。会費は取らず、会員や協力者などからの寄付で運営する。

連絡先:〒173-8515 東京都板橋区加賀 1-9-10、国立極地研究所気付ボランティア団体「南極教室」(代表、国分征・東大名誉教授) Tel. 03-3962-4747, Fax. 03-3962-4709

編集後記

第15号をお届けいたします。去る3月29日(予定は28日でしたが、飛行機のトラブルで1日遅れ)には第43次越冬隊(神山孝吉越冬隊長)と第44次夏隊(鮎川 勝観測隊長)が無事帰国の途につかれました。これより一足早く、44次の専用船による観測隊(小達恒夫副隊長)も3月17日に帰国されております。また、4月13日には原口一之艦長他乗組員が晴海埠頭に帰港されました。皆様、大役を果たされ、お疲れ様でした。いずれ、最新の南極情報を「南極」にご投稿をお願いします。本号はいつもと比べいくらかスリムになっておりますが、本年度は各号10頁ぐらいに収めたいという方針です。投稿はできるだけ多くの会員に南極の想いで、逸話、秘話など短編(本誌7号の三田さんの“短編”ではありません)を中心にした話題を多くの会員に書いていただくと考えております。他に自己紹介(自伝も可)も大歓迎です。次号は7月、原稿締め切りは6月27日です。

編集連絡先:神田啓史 国立極地研究所
〒173-8515 東京都板橋区加賀 1-9-10
Tel: 03-3962-4761、Fax: 03-3962-1525
e-mail: hkanda@nipr.ac.jp